それは、どうすればわかるのか。等。
和美の向かう先が、明確になるよう、色々と質問してきた。
和美は、星野から問われる質問に答えながら、いかに今まで曖昧に行先を決めていたか、不明確のまま走っていたかが、よくわかった。
「なんか、そのプロジェクトの成功は、多くの方に影響しそうですね。」
「僕の価値の中に影響するというキーワードがあるんですよ。だから、まるで自分の事のようにワクワクします。」
「ところで、岡本さんは、そのプロジェクトを成功させることで、誰を喜ばせたいんですか？」
「プロジェクトの成功で、誰を喜ばせる・・・・？」
「そう、誰を？」
和美は、思考が止まる感覚を覚えた。
頭をガツーンとたたかれたようなショックを受けた。
考えたことがなかったんだ。
「働くとは、傍を楽にするとも言うじゃないですか。」
「だって、このプロジェクトを進めていって、多くの人が不幸になったら、岡本さん幸せですか？」
「私たちは、誰かを幸せにした時に一番幸せを感じるらしいです。少なくとも僕はそう思います。それが僕の仕事でもありますから。」
答えは、はっきりしているのに、なぜか上手く答えられない和美だった。
それを感じ取ったのか、星野は、

「岡本さん、じゃ、宿題にしていいですか？今の。」
「では、最初のセッションは、このプロジェクトの成功という目標に向かう、本当の目的を明確にするところからスタートしましょう。いいですか？」

星野と最初のコーチングセッションの予約をした。
その後も、お互いの信頼を深めるために、お互いの生い立ちや、大切にしていることや、約束事などをやり取りした。
星野から、どんな子どもだったのかと訊かれて、遠い昔の自分に戻っていく不思議な感じを味わった。

両親と私。
私と弟。
私と夫。
私と由紀。
私と誠
私と沢山の人達

色々な交差点が時空を越えて重なる感じを、まだ和美は自覚していなかった。
まだもう少し、時が満ちていなかった。

しかし、準備が整った人に、神様はちゃんときっかけを用意していた。
和美の進路が変わる大きな出来事が、そこまで迫っていた。

岐路

「あっ！岡本リーダー、お帰りなさい。さっきA社の木村課長から電話がありました。戻り次第連絡が欲しいそうです。」
「山口君、ありがとう。すぐに連絡するわね」

オリエンテーションから戻った和美は、一瞬にして現実の世界に引き戻されていった。
「はい、何とか間に合うようにします。わかりました。よろしくお願いします。」
和美は、受話器を置いて、ため息と一緒に天井の照明に目を細めた。
「何とか遅れを取り戻さなくちゃ！」
「でも、どうしたらいいの？」
和美は、声にならない独り言を聞いていた。
星野の顔が浮かんで、あの質問がよみがえってきた。
「プロジェクトの成功で誰を喜ばせたいのか？」
「プロジェクトの成功は目的じゃない・・・・・」
和美は頭の中で、メンバーの顔。金子部長の顔。木村課長の顔。家族の顔。そして、この企画の商品を手にするであろう子どもたちの顔を思い浮かべていた。
「私が喜ばせたい人・・・」
「私が、喜ぶ顔を見たい人・・・」
「私が、幸せであるように、幸せになって欲しい人・・・」
「私は、何のために仕事をしているの？」
和美は、自分に問いかけていた。
その問いが、前の和美とは大きく変わりだしていることに、まだ気づいていなかった。
星野と関わることで、自分の中のコーチが現れだしていた。
和美の中で、大きく舵が切られようとしていた。

思いがけない出来事は、突然やってきた。
迎える人には突然のできごとも、未来から振り返った時に必然だった思うことがある。

誠との遅い夕飯を済ませて、３０分だけの約束で誠はテレビゲームを始めた。
その後ろ姿を１．５秒見とれたあと、テーブルに溜まった学校からのお便りに目を通していた。
今、和美はビジネスウーマンから母へと変わろうとしていた。
しかし、ゼミの抜け殻のように、まだ変わりきっていない自分を家庭に持ち込んでいた。

由紀の学校からの便りを開いた８時４０分過ぎに、ちょっとお茶目な携帯の着信音が鳴った。
誠は家族の携帯の着信音をこっそり変える天才なのだ。
２．３日前も電車の中で消し忘れた携帯が、水戸黄門の音楽を流した時は、この電話誰のですか？と他人事にしたいほど恥ずかしい思いをした。

「ハイ、岡本です。ハイ、・・・えっ！・・・・・」

和美は自分が言葉を失っていることと時間がやけにゆっくりなことに、しばらくして気がついた。
自分を少し取り戻した後、どうしていいかわからず、真也の携帯の番号を押していた。

いつもと違う何かを感じた誠は、「お母さんどうしたの？」の言葉さえ、ためらっていた。
楽観的な誠でも、何かただ事ではない緊張感を感じていた。

電話をかけてきたのは、３つ離れた駅の前の交番からだった。
由紀が、万引きをして補導されたのだ。

「なぜ？」

由紀は受験に備えて塾にいっているはずだった。

決められた通りに事は流れていくはずだった。それ以外に何かが起きることは、想定されていなかった。
「なぜ？」タクシーの中で何度もそれを繰り返しながら、暗闇が覆う恐怖と、心臓を後ろから握り占められるような息苦しさと、情け無いくらい自分を責めて悲しくなる自分がいた。
「どうして？」その問いかけは由紀と自分に向けられていた。
警察に着くと、先に真也が着いていた。「パパ・・・」それ以上の言葉が続かなかった。
真也の顔を見たとたんに、こらえていた涙があふれてきた。
「今、事情徴収をしているらしい。由紀は初めてだから、すぐに帰れるらしいよ」
「ほんと・・・」声にならない。

「何人かのグループでやったらしい。他にも同じ中学の女の子が３人捕まって、２人は逃げたらしい。」
「その子たちは、ずいぶん前から目を付けられていた常習犯だったから、その子たちと一緒だったということで、一緒に補導されたらしい。」

いつもは、TVのバラエティーか、週刊誌の中の話が、自分の家族の中で起きている。

「由紀は、どうしてこんなことしたんだ？」真也が独り言のようにつぶやいた。
「お前は、なにしてたんだ！」真也は、決して言ってはならない言葉を飲み込んだ。
喉の奥で苦い味がまとわりついた。

岡本の家に、大切なメッセージが届いた。
和美や真也に、大きな気づきを起こすライフイベントが起きた。

シフト

３人が乗るタクシーは、暗い道を家路に向かっていた。
今まで、それぞれが気づかずに逸れていた道が、もう一度、本来の家族の道へ、戻って行くようだった。
そこには、もう一人の家族が待っていた。

また、家族が本当のチームになろうとしていた。
そのためには、きっかけが必要だった。

「お父さん、お母さんごめんなさい・・・」無言のままずっと、涙を流していた由紀が、言葉を搾り出したのは、タクシーがもうすぐ玄関先に停車しようとしている時だった。
それから先の由紀の言葉は、和美の胸の中で嗚咽に変わっていた。

「なんでこんなことしたんだ？」
飲み込んだこの問いの答えを、真也も和美もなぜか知っているような気がした。

和美はただ由紀を抱いていた。
抱いているのに、なぜか自分が抱かれている不思議な感覚を抱いていた。
由紀と自分の２人を心から受け止めていた。

「ごめんね。」和美が心の中でつぶやいた。
が、まだ声には出せない。あと少しだけ和美には勇気が必要だった。

そんな２人の肩を真也は左手でそっと抱きかかえて、玄関の鍵を開けた。
時間は１２時を回っていた。
リビングの明かりは、和美が出かけた時のまま止まるように煌々と点いていた。
リビングで、誠が寝崩れていた。
テーブルには、３年前のアルバムが開いたままだった。
気がつくと、和美と２人で食べたオムライスの食器が、洗って立てかけてあった。
誠は、いつも家族を独特のユーモワで楽しませてくれる。
でも、それは、悲しいくらい一生懸命な気遣いなのだ。
誠は家族のみんなが辛い顔をするのが、どうしようもなく嫌だった。

愛しかった。
和美は、なぜか由紀が産まれた時の、胸に抱いた感触を思い出していた。
誠が生まれた時の匂いを、思い出していた。
この子達と一緒に幸せを感じていたい。
この子達に、生まれて来てよかったと思って欲しい。
生まれたことが奇跡ならば、それを存分に楽しんで欲しい。
今、この子たちが、私たちの元に生まれ、存在していることが一番大切なこと。
そう素直に思えた。

本当に大切なものを無くしそうになると、それを教えてくれる出来事がある。
由紀が教えてくれたと二人は思っていた。
言葉以外の大切なメッセージを由紀が投げかけ、真也と和美はしっかりと両腕に受け取っていた。

真也が誠をベッドに寝かせた。
誠のベッドの横には、大事そうにサッカーボールと全日本のポスターが貼ってあった。
和美は由紀の手を握り、心の中で昔と同じ子守唄を歌った。

由紀が眠りに着いた後、真也が切り出した。今まで口に出さなかった言葉だった。
「どうして由紀はあんなことをしたんだろう？」
「・・・？」
真也に和美の答えは必要なかった。
２人の会話のきっかけが欲しいだけだった。
「俺達は何を大切にしてきたんだろう？」
「・・・・・」
２人から答えは出なかった。
しかし、答えが重要じゃなかった。

自分に問うことでちゃんと何が一番大切か思い出していた。
長い夜だった。
大切な夜だった。

和美は、翌日会社を休んだ。
確かにプロジェクトは心配だった。
しかし、取り戻せないものが何かを和美はしっかりと知り、決断した。
会社に電話をすると、山口が出た。
その声の明るさが、和美には救いだった。
ほんとに、人は誰かに影響を受けて支えられている。そう感じた。

河合に電話を代わってもらった。
いざという時は、一番年長の河合が頼りになる。
和美は、河合だけには、他のメンバーには他言無用の約束で、昨晩のことを話した。
仕事を始めてからこんなに私的なことを他の誰かに話すのは初めてだった。

和美の話を一折聞いた後、河合の声が心なしか開いたような気がした。
河合は力強い声で、会社の事は心配しないで由紀の傍にいて欲しいといった。
和美は彼の言葉に頼ることにした。
本当にありがたかった。
人は一人では生きていけない。
人と人との関係性が無しでは、人は幸せになれない。
星野の顔が一瞬よぎった。

安心して由紀の部屋に様子を見に行くと、由紀は頭まで布団をかぶって丸まっていた。

しばらく、由紀の肩に手を置いて、和美は言えなかった言葉を声にした。
「由紀ちゃん、ごめんね。」
「ごめんね」が最後まで言い終わらないうちに、涙がこぼれてきた。
それと同時に、由紀が顔を伏せたまま。和美の胸に抱きついてきた。
「お母さん、ごめんなさい」咽ぶように声にならない。
「由紀ちゃん、ごめんね。」微笑む和美の頬をまた涙がつたった。
あとの言葉は要らなかった。
２人の間に、昔のぬくもりが戻っていた。

真也も会社を休んでいた。
朝、誠に学校から帰ってきたらサッカーをやる約束をさせられていた。
ひとしきり涙を流して、由紀はポツリポツリと色々な話をしだした。
和美は、ただ心から聞いていた。
由紀が言いたいことを、言葉を超え聞いていた。
受験のこと。
弟の面倒を見なくちゃいけないこと。
わかっているけど、なんで私がって思うこと。
家に居場所が無いと感じる時があること。
自分でも自分の事がわからなくなる時があること。
もっと誉めて欲しいこと。
時々すごく甘えたくなること。
ただ、話を聞いてほしいこと。

これまでの和美なら、何か言ってあげなくちゃいけないとか、解決してあげなくちゃいけないとか、話の途中で考えていた。
しかし、今日はそんな自分のエゴは横において、ただ聞いていた。
お昼近くになる頃、いても立っても居られなくなって痺れを切らした真也が、部屋を覗き込んだ。
そこには涙の痕で、顔をくしゃくしゃにして笑っている２人がいた。
由紀は真也の顔を見つけると、ちょっとバツが悪そうに、恐る恐る声にだした。
「お父さん。ごめんなさい。」
真也は小さく「うん」とだけ言って、由紀の頭を優しく小突いた。
いつもなら、正論を盾に有無をも言わせない真也だが、今日は、言葉が無い分優しさだけが際立った。
和美は、星野が「正論で人は動かない」。」と言っていたのを思い出していた。

真也は、昨日、誠が引っ張り出したアルバムを片付けながら、ページをめくって若かりし夏を懐かしんでいた。
「由紀は、最初保育器に入ってたんだよな」
「誠って、写真に写るとき、いつもおんなじ顔するんだよな」
「ママ、若いな〜〜〜」
「俺、こんなに痩せてたっけ」
こんな笑い顔の真也を見るのは久しぶりだった。
和美は、真也のこの顔が好きだった。
笑顔の思い出をめくる時間は、あっと云う間に過ぎた。
「お父さん、サッカーやろーーー！！」
学校から帰ってきた誠がなだれ込んできた。
どうやら「ただいまー」を言う間も惜しいらしい。

真也は、キッチンで一緒に料理をしている2人にウインクをして出て行った。

「誠、上手くなったな」
「お父さん、前より鈍くなったね。」
「なんだと〜〜〜！」

二人の声が、久しぶりに夕日に染まって聞こえてきた。

たった1日の出来事。
でもとっても長い大事な人生の1日だった。
昨日までの線路が、ガジャっと音を立てて行先を変えた。

岡本家にとって、何かを知らせる大切な出来事があってから、数日が過ぎた。
あれから、この家族に小さな変化が生まれていた。
誰も気づかないうちに、でも一歩ずつ確実に、季節の訪れのように。

「誠、明日の準備は済んでるの？」
「大丈夫だよ。任せて！」
「ねえ誠、誠はサッカーのどんなところが好きなの？」
「あのね、サッカーはチームプレーなんだ、試合が始まったら全部自分達で、どうしたらゴールを決められるか考えなくちゃいけないの。」
「アイコンタクトも大事なんだ。」
「アイコンタクトね、それで？」